

■（125）本棚の「参考書」、テレビ記者はなぜ手にしたのか

テレビ局記者だった亡き父の本棚で、古い文庫本の表紙に目が止まった。「文章表現のカギ」（大熊五郎著、学燈文庫）。発行は1981年。著者は冒頭で「高校・大学生向け」と説明している。約20年の経験を持つ中堅放送記者が、その本から何を学ぼうとしたのか。

報道文の一つとして、放送原稿を取り上げている。その特徴と、推敲する際の助言が並ぶ。まずは「要約や繰り返しをはさみなさい」。話し言葉は、新聞のように前に戻って内容を確認められないので、聞く人の理解を助けるために必要だとしている。同音異義語を避けなさい、ともある。「貴社の記者は…」。耳で聞いただけでは混乱しそうだ。「お宅の会社の記者は」のように他の言葉に置き換えればいいという。

一方、新聞は内容のダブリを嫌う。限られた紙面で多くのことを伝えたいので、表現はなるだけ簡潔にする。両者の違いは歴然としている。学級新聞を書く時と校内放送を流す時は、発想を切り替える必要があるようだ。

本発売のころ、父は隠れキリシタンをテーマにした小説に取り組んでいた。病で不自由な手でワープロをたたいて書いた処女作が、「遺作」になった。その小説の、色あせた本をめくることにした。（山）